

日本経済新聞連載『やさしい経済学』

「社会科学で今を読み解く」

歴史を学ぶことを問い直す（歴史から見る現代）

1000字 x 10/12 高山博

1、なぜ歴史を学ぶのか（約920字、20x46）

いま日本は大きな変化のさなかにある。自分を取りまく環境が急速に変わっていることは分かっている、いったい何が起きているのか、これから先、日本の社会や世界がどう動いていくのか分からず、大きな不安を抱えている人も少なくないだろう。実際、いま生じている変化は、日本のことだけを見ている、現代のことだけを見ている、理解することは難しい。

このような大きな変化の時代には、人間の長い歴史を扱ってきた歴史学が、将来への羅針盤となってくれる。人間社会を扱う学問には、様々なものがある。物事が安定し枠組みが変わらない状況での分析を得意とする静態的な学問もあれば、歴史学のように、社会の枠組みそのものが大きく変動する状況での分析を得意とする動態的な学問もある。歴史学は、所与のものとされている枠組みの変化自体も分析の対象とし、変動する社会や世界の方角性を見据えることのできる学問なのである。

私たちが生きている現在の社会の特徴は、現在だけを見てもわからない。日本社会の特徴を知るためにアメリカ社会や中国社会

と比較するように、現在の社会の特徴を知るには過去の社会と比較する必要がある。過去と比較することによって、初めて現在の特徴が浮かび上がってくるのである。そして、これから先の世界の動きを予測するためにも、過去を見る必要がある。時代の変化や方向も過去との比較によってのみ把握可能だからである。

様々な変化の中でいったいどの変化が重要性をもつのか、どの変化が私たちの社会のあり方を大きく変え、長期にわたって持続する特徴となるかを知るには、ある程度長い時間軸の中で検討しなければならない。大きな変化はより長い時間軸の中におかなければ、認識できないのである。

例えば、現在進行している最も重要な変化の一つ、国家の枠組みの変化は、19世紀に近代国民国家ができた後をいくら調べてもなかなか理解できないだろう。それ以前の、国家の枠組みがはるかに弱い時代を見ることによって、現在進行しているグローバル化の国家への影響を想像することができるのである。

(46行)

2、グローバル化と歴史学（約1000字、20x51）

現在進行しつつあるグローバル化は、時代を画する歴史の分水嶺(れい)となるだろう。日本という国を越える巨大なグローバル市場が生まれ、それが経済のみならず人間活動の諸側面に大きな影響を与え始めている。

私たちが迎えようとしているのは、物や人、情報、資本が国境を越えて自由に行き来する世界である。誤解してはならないが、このグローバル市場は、文字通りに地球全体を覆っているわけでも、固定した特定の国家群を指しているわけでもない。現在のところ、それは、通信や流通、金融の網の目が覆う、米国、欧州、日本を中心とした地域を指しているにすぎない。しかし、その範囲は急速に拡大し、中心地域の統合の度合いは猛烈な早さで強まっている。

このグローバル市場の統合の強化は、国ごとの社会的完結性の喪失と表裏一体の関係にある。これまで私たちは、独立し完結した社会をもつ主権国家を前提に、世界をその集合体という具合に捉(とら)えてきた。しかし、現実はずでに、国民への影響力を低下させた国家と国境を越えて活動し大きな影響力を行使する様々な非国家組織が競合する世界へと移行している。

日本もグローバル化の動きから逃れるこ

とはできない。物や人、情報、資本が国境を越えて自由に行き来するようになれば、これまで私たちが当然のこととして受け容れてきた日本社会の完結性は失われてしまう。

グローバル化した経済活動が支配的となった状況では、外部と遮断して、国内の動きを予測したり国内政策を実行することは不可能に近い。かつては、日本人の活動のほとんどが国境の内側で行われていたから、為政者は国内の様々な問題を日本という枠組みの中で処理することができた。日本の法律や制度を整えれば、ほとんどの問題に対処できたのである。しかし、現在ではそれが機能しなくなりつつある。いくら日本の法律や制度を変えても、日本で生じている問題を解決できない状況になってきたのである。

人間活動のほとんどあらゆる領域がグローバル化の影響を受け、私たちの世界認識、活動の準拠枠は大きく変化することになるだろう。歴史学の世界も今、大きな変容を遂げようとしている。近代国民国家を主たる準拠枠として発展してきた近代歴史学が急速に力を失い、国境を越えた動きを整合的に説明できる歴史が強く求められるようになってきたのである。(51行)

3、過去は未知の世界

多くの人たちは、過去を確定したものだと考えているが、そうではない。私たちが歴史について知っていると思っていることのほとんどは、本で読んだり、誰かから教わったり聞いたりしたものだ。古代ローマのカエサル暗殺事件も、豊臣秀吉の天下統一の話も、自分の目で見たことではない。実際には、私たちは、自分が生まれる遥（はる）か以前の時代の歴史や自分が訪れたこともない世界を人から聞いたり学んだりして、自分の歴史観や世界観を形作っている。

また、確かなはずの自分の体験も、よく考えてみれば、あやふやなことだらけだろう。その体験が何かに記されていれば、自分の記憶を確認したり修正したりできるが、自分の体験すべてについて記録が残っているわけではない。

私たちが歴史として学んでいる過去は、このような個人の体験を遥かに越える広大な空間と時間を対象としている。そして、そのほとんどが誰にとっても個人的に体験することのできない未知の世界である。歴史学は過去の痕跡を手がかりにしてその未知の世界を調べたり再構成したりする学問なのである。

そのような未知の世界を理解するには、何らかの枠組みが必要である。例えば、古代・

中世・近代という時代区分も、そのような枠組みの一つである。この時代区分法は、現在広く一般に使われているが、もともとは14世紀イタリアの人文主義者たちが自分たちの歴史を説明するために使い始めたもので、その区分に合理性があるわけでも研究者たちが適切だと考えているわけでもない。

また、多くの歴史家たちの問題意識を長期にわたって支配し、歴史研究の方向を規定してきた重要な枠組みの一つに近代国民国家がある。19世紀に確立したヨーロッパ近代歴史学は、基本的に自国の歴史を研究対象としており、歴史研究の多くが近代国民国家の枠組みの中で行われてきた。その影響は今日まで残り、多くの人たちが、近代以前にもフランスの歴史、イギリスの歴史という各国固有の歴史があるかのように誤解している。

これらの枠組みは、過去を認識したり、説明したりする際に有用な場合もあれば、私たちの思考を縛り、過去の事実を曲解する原因となる場合もある。忘れてならないのは、それらが決して絶対的なものではないということである。私たちは、自分の知りたいことや関心に応じて、そのような枠組みを修正し、作り直さなければならない。(51/51行)

4、事実を探る

歴史家の仕事は大きく二つに分けることができる。一つは、様々な史料を用いて過去の特定の社会の実際の姿を知ろうとすること、可能なかぎりの方法を用いて失われた過去の社会を探求し再現することである。もう一つは、手に入れた過去に関する情報をもとに、社会の変化を見極め、時代の流れを認識し、自らの歴史像を提示することである。

今回と次回は、過去の社会の探求についての話をしたい。人々の行動パターンは、個人であろうと集団であろうと、条件さえ同じであれば現在も過去もそれほど変わらないのかもしれない。しかし、人々を取り巻く環境や社会状況は、時代とともに大きく変化する。そしてそのために、人々の価値観や行動様式が大きく変化する場合もある。

そのような社会状況の違いを知らないと、過去の人々の行動を大きく見誤ることになる。つまり、過去を見る場合、当時何が人々の活動を規定する重要な要因となっていたかを注意深く見極めておく必要があるということである。歴史家が過去の社会を調べるときに最も注意を払うのはこの点である。

歴史家はそのような前提のもとで、過去の痕跡、すなわち、史料を手掛かりに、未知の世界を探り、過去のことがらを正しく認識し、再構成しようとする。史料は文字が記された

石板や獣皮紙、紙にかぎらず、過去に関する情報を伝えてくれる現存物すべて、例えば、伝承、絵画、建築物などを含んでいる。しかし、史料がもつバイアス・恣意（しい）性、現実世界との乖離（かいり）は大きく、過去を認識したり再構成する際の大きな障害となっている。

同時代の観察者が記した日記の場合は当人の認識のフィルターだけを考えればよいが、誰かが書いた地図を別の人が写した地図となれば、明らかに一つ別の人間の認識のフィルターが加わることになる。歴史家と研究対象との間に介在する史料は、通常、幾重にも重なる認識のフィルターをかけられている。

さらに別の歴史家の研究成果を利用するとなれば、その歴史家のフィルターが加わることになる。情報は受け取る側の関心によって常に選別される、ということも私たちは常に意識しておく必要があるだろう。研究対象となる過去は、例えば、それを自分で見て記述した人、その記述を何らかの手段で写した人、その写しを見る研究者という具合に、段階的に、それぞれの関心に従って情報が切り取られていくのである。(51/51行)

5、学問としての歴史学

史料が幾重にも重なる認識のフィルターを帯び、研究者の主観も排除できないとすれば、客観的な歴史研究はありえないのではないかという疑問が生じてくるかもしれない。実際、歴史家の研究成果や作品には常に主観的解釈が介在しているという批判、史料(テキスト)から過去の現実を見ることはできないという批判は存在している。

もちろん、最終的には誰も過去を客観的に復元することも認識することもできない。私たちに過去の本当の姿を知ることはできないし、客観的な歴史が存在するわけでもない。しかし、歴史家は、そのことを了解した上で、過去を研究しているのではないだろうか。歴史学にかぎらず、いかなる学問も、絶対的な客観性を保証されているわけではないし、究極の真理、あるいは、現実を手にすることができるわけでもない。

学問は私たちが生きている世界にかかわるあらゆることがらをその研究対象にしうる。そこには、私たちの精神活動や思考も含まれる。現実が存在していると見做されるものすべてが、学問の対象となるのである。そして、学問はそれらの様々な現象を言葉の論理によって、説明しようとしている。すべての学問は、人間が生活している世界(外界)を認識

するための知的営為、つまり、世界認識と考えることができる。歴史学の場合は、その研究対象が過去から現在に至る人間社会というだけである。歴史家は過去の人間社会に関する断片的な情報を集めて、自然科学者たちと同様、その現象を理解するための説明の体系を作ろうとしているのである。

私たち人間が自分の生活する世界を客観的に認識することは最終的には不可能である。しかし、私たちは外界を認識しようとしている。たとえ、最終的には不可能だとしても、自分が住んでいる世界に関するより客観的な、つまり、より整合性のある説明の体系を作りたいという強い欲求をもっているのである。

そして、人々に過去をよりよく認識したいという欲求があるかぎり、歴史家は最終的には客観的に復元しえない過去を、できるだけ客観的に復元しようと努力する。歴史家は自分が持つあらゆる能力を用いて、史料から過去を可能なかぎり客観的に復元しようとする。そして、歴史家が史料を読み解く技術と知識を身につけた上で、史料から過去を客観的に復元しようとしているかぎり、歴史学は歴史家の恣意的な自己表現の場にすぎないという批判はあたらぬだろう。(51/51行)

6、集団の歴史と近代歴史学

歴史は最初から存在するものではないし、自然に生まれるものでもない。人々の活動があっても、それは意味を与えられて人々の記憶に留められなければ、歴史とはならない。個人の歴史でも君主の歴史でも、国の歴史でも、歴史はある個人がある時点から過去をふりかえって、現在の自分自身あるいは自分が属する集団の由来や来歴を説明するところから始まる。それは、単なる好奇心から発する場合もあれば、自らの支配の正当性や血統の優秀さを誇示するために意図的に作り上げられる場合もある。

しかし、一度生み出された歴史は、時に、その後の人々が共有する歴史の礎となり、様々な修正を受けながら、集団の記憶となる。この歴史を共有する集団は、拡大したり縮小したり、分裂したり統合されたりしながら、記憶としての歴史を保持してきた。

しかし、そのような集団の記憶としての歴史は、文字として記録されることにより長い生命力を獲得し、時には、後の時代に作られる新たな歴史の礎となる。多くの集団を支配する広域政権が生まれたところでは、たいていその統治者の功績を称えたり、統治者の正当性を示したりするために歴史書が書かれた。

ヨーロッパでは、近代国民国家が成立する

時期に、それまでの様々な歴史が、国の歴史へと整序されていった。国境内に強力で排他的な支配権をもつ国家は、その成立の正当性を確保する意味でも、また、その成員に集団の記憶を共有してもらおう意味でも、国の成り立ちを説明する歴史を必要とした。

こうして、19世紀のヨーロッパでは、国家成立史を中心に歴史学の急速な発展を見たのである。この時代には、時間の流れや集団の記憶としての歴史を含む様々な差異が、近代国家の枠組みで統合され、平準化されていた。つまり、それまで重層的に存在していた多様な法慣習・言語・文化の広がり国境によって分断され、国ごとに固有の時間や歴史が再編されたのである。これ以後、ほとんどあらゆる分野で国家が基本的枠組みとなった。法慣習・言語・文化、そして経済活動までも、この枠組みに大きく規制されるようになった。

このヨーロッパの近代歴史学は、20世紀半ばまでについてはそれなりの説得力を持ちえたように見える。しかし、ヨーロッパ以外の地域の政治的、経済的、文化的存在感が飛躍的に増した今日、このヨーロッパ中心的歴史観が説得力を保ちえないのは明らかである。

(51/51行)

7、国家の揺らぎ

近代歴史学の自明の前提であった近代国民国家の枠組みが大きく揺らいだのは、1989年のベルリンの壁崩壊以後のことである。ソビエト連邦は国としてのまとまりを喪失し、代わりに、12の共和国が独立の国家として生まれた。ユーゴスラビアやチェコスロバキアも複数の国家に分裂した。逆に、欧州連合（EU）の創出に見られるように、複数の国家が統合されてより大きな政治的枠組みを形成する動きも進行している。

1990年代になって活発化したこのような政治的枠組み再編の大きな動きが、近代以降に成立した「国民国家」、つまり、確定した領域と主権を持ち、国家への共属意識を有する国民からなる国家が集まって現代世界が構成されているという認識に対して大きな疑問を投げかけたのである。

近代国民国家体制が崩壊した後には、中世型のシステムが支配的になるという論者もいる。確かに、ヨーロッパ中世には、近代国民国家のようにその国境内に強力な支配権をもつ国家はなかったかもしれない。しかし、近代型と対置され、中世型と呼びうるような世界に共通のシステムや中世型国家が存在したわけではない。

ただ、現在生じている大きな枠組みの変動

が、19世紀以後の歴史的变化の中で説明できなくなっていることは間違いないだろう。より長期の歴史的变化の中に位置づけて認識する必要が生じているのである。その意味で、近代以前の、国家の支配権が弱かった中世という時代に目が向けられるのは、当然のことだとも言える。

現在生じている国家の統合や分裂の動きは、既存の国家の枠組みを固定させていた強力な力が弱くなったことを示している。そして、その最も大きな要因の一つが冷戦構造の終焉（しゅうえん）であることは間違いないだろう。この押さえる力がなくなった時、外からの支えで保たれていた国家的枠組みが崩れたと考えることができるからである。他方では、経済活動に主導される広域での統合の動きがある。現代世界では、国家の分裂と同時に、統合が進行している。

国家という枠組みを自明の前提として発達してきた近代歴史学、とりわけ、伝統的な国家史や政治史に対する批判はずっと以前からあったが、その限界を歴史家の目の前につきつけたのは、この国家の分裂・統合という現実の動きである。新たな枠組みを提示することを歴史家は求められている。(51/51行)

8、冷戦後の世界

現代世界をどのように認識するかは、歴史学の最重要課題だが、冷戦崩壊後の世界秩序をめぐるのは、歴史家からではなく、政治学者とジャーナリストから対照的な見解が提示されている。

一つは、よく知られているサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」論である。彼は、現代世界を「文明」で区分けしてその文明間の対立を国際政治の基調とする考え方を提示し、冷戦後の世界はイデオロギーではなく、文明の衝突が国際関係を動かすと主張した。

彼は、「文明」という言葉を「歴史の中で固有の文化と価値体系を作り上げてきた集団」という意味あいを用い、冷戦後の世界では異なる価値体系をもつ巨大な文明集団が衝突すると理解している。

分かり易い議論だが、彼が議論の枠組みとした「文明」は、現代世界の現実の事象を分析するための分析概念としては適切ではない。

「文明」という言葉がもつ曖昧性が、「文明集団」の恣意的な選択と極端な単純化をもたらすからである。また、グローバル化の進展が、この「文明」という枠組みが機能しない状況を生み出している。

冷戦崩壊後の世界をめぐる提示されたもう一つの興味深い見解は、アメリカのジャー

ナリスト、トーマス・フリードマンのものである。彼は、グローバル化が、国家の間の壁、冷戦構造の壁を吹き飛ばし、世界を「冷戦システム」から「グローバル化システム」へ移行させたと考えている。

彼によれば、冷戦時代の世界は、広大な平野がフェンスや壁や溝で仕切られ、方々に袋小路があるような状態だった。そこには、ベルリンの壁や保護関税などの障壁があり、その障壁の内側で、人々は独自の生活形態、政治形態、経済状態を維持していた。その障壁のおかげで性質の大きく異なる経済体制、政治システムを共存させることができた。

しかし、冷戦の崩壊によって、これらの壁は崩壊し、世界は一つの平原に変わった。そして、この平原は、今、さらに多くの壁が吹き倒され、より広くより開かれた空間に変貌しつつあるという。

この見取り図は明解で、グローバル化の本質をわかりやすく説明してくれる。しかし、実際に現実の世界から壁が消えてしまったわけではない。国家という政治的な壁は厳然としてそびえ、国家のあいだには多くの制度的障壁が存在し、ナショナリズムは強い生命力を保持しながら新しい壁を作ろうとしている。

(51/51行)

9、歴史の地殻変動

ごく最近まで近代国民国家を枠として形成された歴史を越えて、よりグローバルな動きを見る歴史は、切実には必要とされていなかった。

政治・経済・文化、様々な分野の活動が国の枠組みの中で行われ、人々がその枠組みの外の人たちとあまり接触しない状況下では、各集団がどのような価値観のもとで、どのような歴史像を抱き、どのような世界観をもっているかは大きな問題とならない。そして、それぞれの歴史は集団の共有される記憶・世界観として機能し続ける。

グローバル化の進展は、そのような国ごとの歴史に大幅な修正を求めることになるだろう。しかし、今私たちが新しい歴史の枠組みを必要としているのは、単に過去に対する認識のすり合わせを行うという理由からではない。むしろ、私たち一人一人が自分の生きる世界を認識するために、従来とは違った歴史像・世界観を必要としているからなのである。

日本に住むか否かにかかわらず、私たちは現実の世界の動きを説明できる歴史を必要としている。現在の日本社会の動きは日本だけを見ていても理解できない。私たちはグローバル化した世界の一部として日本を認識し、その中に自分を位置づける必要がある。流動性が高まり、かつての閉じた日本社会がもは

や存在していないことを認識しなくてはならない。この現実から目をそむければ、結局、私たちの周りで生じている事柄の因果関係を見極めることができず、未来どころか、現実の社会の変化が見えず、絶えず不安の中で生きていかなければならないことになる。

異なる文化的背景を持つ人々が恒常的に接触している中で、日本人のためだけの歴史やフランス人のためだけの歴史が意味を失いつつあるのは当然だろう。必要とされているのは、複数人間集団や国家、様々な文化圏を包含する世界史である。ヨーロッパが拡大していく歴史やヨーロッパを先頭に人類が進歩していくという単線的な歴史ではない。

たとえ、お互いに直接的な接触や交流がなくとも、地球上に存在していた様々な人間集団がどのような社会を築き、どのようにそれを変化させてきたのか、それらの人間集団間の関係がどのように変化してきたのかを説明できる複線的な歴史である。それは、地球上で活動してきた人類を一体とみなし、その構造や内部関係の変化を重視する人類の全体史、つまり、「グローバル・ヒストリー」だとも言うことができる。(51/51行)

10、教養としての歴史

多くの人たちは、歴史学を含む人文学を役に立たない趣味の学問だと考えているようだが、人文学は、人間や人間集団、社会を研究対象とする学問であり、人間が生きていく上で非常に有用な知や洞察力を与えてくれる。それらは、短期間に改良されていく技術や短期間しか使えない知と違い、長期にわたって有効性が持続する知である。人文学は、虚学どころか、私たち一人一人が人生を生きる上で重要な、きわめて実践的な学問だと言える。人文学が、大学の教養教育の核として存在してきたのは当然だろう。

近年、日本では、大学での教養教育が縮小される傾向にあるが、時代遅れになることのない教養教育の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。技術や知は専門的であればあるほど、早く新しいものと置き換えられる傾向にあるが、教養は専門知ほどに早くすたれることはないからだ。指導的立場に立つ人材を養成するためにも、教養教育はきわめて重要である。日本や国際社会で政治・経済・文化をリードしていくリーダーたるべき人材を養成するために、教養教育を重視するというのは大学がとりうる重要な選択肢のはずである。

ハーバード大やエール大、オックスフォー

ド大やケンブリッジ大など、欧米の主要な大学では、人文学は大学の重要な位置を占め続けている。また、ドイツやフランスのように、国家が強力にサポートしているところもある。これは、欧米の大学や国の意思決定者が、人文学の重要性を強く意識しているからである。

例えば、哲学であれば、様々な人間の思想や考え方を知るだけではなくて、人間の考え方の基本的なフレームワークを提供してくれる。歴史であれば、歴史上の人物に共感したり、過去の社会の実際に驚いたりするだけではなく、歴史の流れを身につけることによって、現在の自分と自分の生きる社会の位置づけを容易にしてくれる。

私が、エール大学院に在籍していた時出会った学部生たちは、歴史や哲学の面白さを在学中から実感していた。授業では、断片的な知識ではなく、歴史や哲学の大きな枠組みを体系的に教えられていた。そして、そこで得た知見は、歴史や哲学という学問に限らず、人間の営み全体に普遍的に役に立つものであるという認識を、教える側も学生ももっていた。政治の世界でもビジネスの世界でも、欧米のリーダーたちは、そのような教養の基盤を共有しているのである。(51/51行)

11、未来を見通すために（約960字、20x48）

私の主たる研究対象は、イスラーム文化、ビザンツ文化、ヨーロッパ文化が接触・交流し、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語の史料が残る中世のシチリア島である。この島は、三つの文化圏を比較し、三つの文化の接触・交流を研究できる絶好の場なのである。

そして、この中世シチリアは、現在の世界を見るための理想的な場所でもある。グローバル化が進展し統合が進む現在を理解するには、一つの国の過去との比較だけでは十分でない。複数の国や文化圏を含む過去との比較が必要となる。中世シチリアは、まさに複数の文化圏を含む地中海の中心なのである。そのような過去の世界と比較することによって、私たちは現在の自分たちの位置や状況をより正確に認識することができる。

これまで述べてきたように、歴史家は、一方では、様々な史料を用いて過去の特定の社会の実際の姿を知ろうとする。可能なかぎりの方法を用いて、失われた過去の社会を再現しようとするのである。しかし、他方では、社会の変化を見極め、時代の流れを認識しようとする。現在のように社会が大きく変化するときには、短期的な変化しか予測しえない

現状分析は、将来への有益な指針を与えることができない。過去から現在に至る人間の活動や人間集団の変化を長期の時間軸で認識しようとしてきた歴史学は、時代の目としての責務を果たさなくてはならない。

これから起こる社会の変化を読みとるのは難しい。しかし、その変化を見きわめて将来に対する指針をもたなければ、激しく変化する社会の中で自分を見失ってしまう。歴史学は、この時代の変化を長い時間の中において見据え、社会の進む方向を教えてくれる学問である。決して、過去を記憶したり、なぞったりする学問ではない。緩やかに流れる時代にあっても激動する時代にあっても、歴史学は私たちの行く手を照らす一条の光となる。

第二次世界大戦前にエール大学の歴史学教授だった朝河貫一は、あるインタビューで「歴史とは何ですか」と聞かれ、「歴史とは熱なき光である」と答えている。歴史学は、過去から現在までをあるがままに見ようとする学問であればよい。そうすれば、より客観的に自分たちの立ち位置を照らし、将来に対する指針を示してくれる。そして、それが歴史学のもつ最大の長所なのである。(48/48行)